

第14回館長講座 『第2の道具 土偶をめぐる(1)』

館長：みなさん、こんにちは。今日は土偶の話を見せて下さい。

「第2の道具」と書きましたが、「第2の道具」というからには「第1の道具」があるはず。縄文時代の人々は、土や石を始めとして、色々な材料から様々な道具を作り出しています。その道具は、材料に従って、土器・土製品とか石器・石製品、あるいは骨角器・骨角製品などと呼ばれています。それらの用途は、大部分が当時の人々の毎日の生活を維持していくための道具です。言い換えると「食料を得るための道具」だと言えます。鎌（ヤジリ）、銚（モリ）、魚叔（ヤス）など。それから、食料を調理する道具として、石皿、叩き石、土器など。身の周りの物を製作したり、穴を掘ったりすることに使う道具として、骨製の針や石斧などというものがありました。

ところが、縄文時代の人々が残した遺物の中には、用途がある程度推測できるものの他に、用途が必ずしも明確でないものが多数存在します。特に縄文時代の半ば以降、時期を追う毎にそのようなものが増えていきます。それらの道具が「第2の道具」とまとめられるわけです。

この「第2の道具」ということを言い出したのが、小林達雄さんでした。小林さんの説明によると、「第2の道具」というのは、「世界観やイデオロギーに関わるものである。また、儀器であり、呪術具であり、形はシンボリックであり、具体的に機能を示すものとはならない。機能の効果は、労働によってではなく、祭式、祭事によって果たされるようなものだ」としました。言い換えると、これらは縄文時代の人々の精神の世界に関わる道具であろうとされたわけです。

具体的には、土偶・岩偶・動物形土製品、これは、土偶です。これは、同じような人の形ですが、材料は石なので岩偶、そして動物の形をしたのが動物形土製品です。

ちなみに、この土偶ですが、今年話題になりました。あるオークションに出されて2億円で落札されました。下半身は無いのですが、全部あったら…どうでしょう…4億、5億するのでしょうか。恐ろしい世の中になったと思います（笑）。

さらに、土版・岩版、これは同じような用途ですが、材質が違います。それから、三角形土版や三角形岩版があります。これらは土偶の簡略化されたものという見方もできるようです。それほど大きなものではありません。それから、このような土面です。これは、顔にすっぽりとかけるものではなくて、額に載せるくらいの大きさのものです。土で作られたお面。それから土冠・石冠、三角壙形土製品としました。これなどは、何だか全然分かりません（笑）。土で作られていますから、土冠ですが、土でできた冠のような形をしているということでの名前の付け方です。それから、三角壙形土製品という名前のものとか、石剣、石刀、石棒などです。

また、左が青竜刀形石器、右上は御物石器、下が独鈷石…独鈷状石製品とも言います。仏教における仏具、儀式道具の独鈷に似ていると言うのでこう言います。そして、耳飾り、これは腕輪、これは垂飾、勾玉、腰飾り、こういうような身体を装飾するための道具というのがあります。これは腰飾りと言って

いますが、ほとんどが男性の腰の辺りから出土していて、腰を飾る物だろうということで「腰飾り」という名前になっています。この腰飾りは総合展示室に展示してあります。

その他に土器の中にも、用途の分からないようなものがあります。以前にもお話しましたように、本来、縄紋土器は、ほぼ一貫して食物の調理とか貯蔵とかを目的にして製作されてきたものです。ところが、土器の中には、そういう目的や機能を果たしえない形態のものや容器、入れ物の形はしているが、遺跡の中での出土状況とか非常に過剰な紋様の点、装飾の上などから、普通の土器とは用途が違うかもしれないと考えられる土器も存在します。そのような土器は後期の半ば頃から出て来るものが多いのです。

これは異形台付土器です。これは、同じもの、角度を変えたものです。これは口縁部が楕円形で、横から見ると船のような格好をしているので、舟形土器と言います。これは香炉のような形をしているので香炉形土器と言います。これは…ここのスケールが 5 cm で、非常に小さいです。中期後半には、このような非常に小さいミニチュア土器とか袖珍土器というものがでてきます。

このようなものは、非生活的な土器という言い方をしてもいいでしょうか。日常生活の中で使うものとは違だろうということで、これらも「第2の道具」とされるものと似たような意味を持つものとして考えていいのではないかと思います。

「第2の道具」の代表的なものが土偶です。

土偶の話の前に、土偶と似たような造形物が先史社会にはあるわけです。これは通常、食料を獲得する際に女性像を作り、女性の出産に仮託する…つまり生命を生み出す女性の力に仮託し、豊かな収穫を祈るというようなことが農耕開始以前の後期旧石器時代にも行われていました。旧石器時代の女性像として、ヨーロッパからシベリアなどにかけて、石製や象牙製の乳房や腹部・臀部を強調したヴィーナス像と呼ばれるものがあります。材質に違いはありますが、これらはヨーロッパや西アジアの土偶と同じ願いが込められたものではないかとされています。

これは薄暗い写真ですが、ウィーン自然史博物館のもので、かろうじて撮れた写真です。ヴィーナス像という所のヴィーナス像で、非常に有名なものです。大きさは高さ 11.1 cm の小さな像です。この展示の仕方が本当に素敵で、三畳くらいの空間の中でちゃんと屋根も付けて、その中に、これ一つだけポツンと浮かび上がるように展示してありました。周りが暗いので、写真はこのような感じにしか撮れませんでした。

ミュージアムショップに行ったら、これの…レプリカ以前のものですが（笑）…鉛筆の先に付いた消しゴムなんですけど、これが付いたものがありました。これは、全形が分かって良いなと思い、ちょっと紹介です。前から見るとこうです。後ろから見ると、こうです。横から見るとこうです。顔は定かではありません。形からして、明らかに女性像であることは間違いないです。持って来てお見せしようかと思いましたが、出掛けるときのバタバタで、つい忘れてしまいました。まだ消しゴムとしては使っていません（笑）。

それから、もう一つ、これはフライングかもしれませんが、来年の3月の末から、当館でもラスコー洞窟展が開かれます。現在、東京の国立科学博物館で開催中です。そこで展示されていた旧石器時代のヴィーナス像です。これはルール違反をしていると自覚していますが…東北歴史博物館にまで来るのか確認していませんが、これもひとつの例です。ヴィーナス像です。髪の毛が背中にかかり、両腕が身体に密着し、胸や腹が膨らみ、尻が大きく腰が幅広く、腿が太いという、典型的なヴィーナス像として挙げられています。

こういうものが旧石器時代にはありました。

土偶そのものは、世界各地の先史時代を中心に広く見られるもので、人間を象った土製品です。大部分のものが、乳房や臀部を誇張した女性像です。大部分としたのは、後でお話しますが、女性でないものもあるからです。要するに土で作った人形です。素材に石を使ったものは先程も紹介した岩偶です。これは材質の違いが主な原因だけで、用途的にはほとんど同じだろうと考えられています。

ヨーロッパや西アジアなどの農耕を主な生業とする新石器時代の社会の中では、この土偶というのは生産や豊かな実りを祈る大地の母、「地母神」崇拝のための道具であるとする解釈が一般的です。さらに時代が下がってくると、玩具となったものや死者への副葬品として使われた土偶もあります。

世界史の中で、最古の土偶とされるのが、右上のこれです。チェコのドルニ・ヴェストニース Dolni Vestonice 遺跡の、まだ新石器時代ではないですが、オーリニャック Aurignac 期と呼ばれる時期の堅穴住居跡からこれが出ています。明らかに土が焼かれて作られたヴィーナス像です。焼かれて作られたという解釈が一般的ですが、そうではなくて「焼けてしまったんだ」という見方もあるようです。しかし、今のところ土偶の最古のものとして、よく採り上げられます。

西アジアのメソポタミア地方の農耕社会では、新石器時代初頭のまだ土器の現れない時期にすでに女性像、あるいは人間の顔を表現したような土偶があります。こちら側は、ハラフ Halaf 期といい、大体紀元前 6000 年～5000 年くらいの時期の土偶です。うずくまった土偶です。これは顔が省略されていますが、これも女性像です。それから、ハラフ期の次のウバイト Ubaid 期、大体紀元前 5000 年～3500 年くらいの時期のものです。これは、ヘビのような顔をしています。こういう特徴的な土偶があります。

エジプトでは先王朝時代に、お墓に副葬された土偶というのが出て来ています。

日本の様子を見ると、旧石器時代後期にナイフ形石器という石器が作られる時期があります。その時期にこけし形石器製品と呼ばれる一種の岩偶が出ています。よく見えませんが、ここに目があります。ここが鼻で、この辺が口です。窪みで顔を表現しています。これは大分県岩戸遺跡から出土しています。

それから、縄紋時代に入って、草創期の隆起線紋土器の時期の愛媛県上黒岩遺跡…愛媛県と高知県の境界付近にある洞穴遺跡で、ここから長さが 5 cm くらい、幅 3 cm の扁平な緑泥片岩、石に長い髪の毛や乳房・腰蓑の表現が見られる線刻礫が出土しています。これは女性の姿だということで土偶と共通性を見せる遺物といえます。

上にあげたこけし形石器製品は、身近なところにあります。というのは、東北大学理学部自然史標本館に展示されています。これは、東北大学におられた芹沢長介名誉教授が発掘された資料ということで、

展示品となっています。ここは無料で入館できますが 2 階の旧石器時代の資料が並んでいる所にあります。ここに図化したものがあります。こんな顔をしているようです。他の遺跡では出ていません、こけし形石器製品というのは、これ 1 個だけです。

では、土偶とはいったい何なのでしょう。土の人形だということだけで終わりではなくて、それを作った縄文時代の人達の意識というのが、どこかにあるはずだと思います。そこで、土偶の意義の解釈をみます。明治時代になり、E・S モースが大森貝塚を調査し、それによって考古学が新しい学問として歩むようになっていったわけですが、そうした中で、最初に土偶をとりあげて、その目的などを提案したのは白井光太郎です。「貝塚より出でし土偶の考」(明治 19 年 人類学会報告 2) の一文をものしています。この中で、白井光太郎は東京都の池袋貝塚…今は痕跡もありますが、池袋に貝塚がありました…と青森県の亀ヶ岡遺跡の土偶を資料として、交易、服装について述べています。また土偶の使用目的についても述べています。「第一 小児の玩弄物に製せしか、第二 神像と爲し祭りしか、第三 装飾と爲し之を帯ひしかの三疑に止る可し」つまり「玩具」という考え方と「神像」と「装飾に用いたもの」という考え方を挙げました。しかし白井自身は、この三つのどれでもなく、「オーストラリア土人」という書き方をしていますが、オーストラリアの風俗から見て、「服飾にして或いは護身牌を兼ねしものならんと思ふなり」と結んでいます。つまり、身に付けて、護身牌なのでお守りみたいなものという解釈をしたわけです。

その後、土偶は貝塚から採集されることが多かったので、貝塚土偶という名前が定着していきます。明治 24 年に、若林勝邦が、それまで知られていた 34 点の土偶について、発見された場所、遺跡の種類、土偶の部分、頭・胴など、所在地、現在どこに所有されているかを示しました。非常にたくさんの図を掲載しました。さらに、この 34 点について、3 つに分類しています。これが土偶を分類するということをした最初のもののようです。

分類は、「第一 内部空虚ニシテ表面ノ装飾密ニ画カレ全形大ナル土偶」。「内部空虚ニシテ」というのは土偶の体の中に粘土が詰まっていないということで、後に中空土偶というようになります。

「第二 内部充實シ全軀偏平ニシテ表面ノ装飾多ク省略セラレ全形小ナル土偶」。「内部充實シ」というのは先程の中空とは逆で、軀の中が全部粘土でできているということで、後には中実土偶といいます。

「第三 顔面ノ部分ノミニシテ恐ク器物ノ一端ニ附シ装飾トナセシモノ」。土器の口縁部のところに顔面の付いているものがありますが、そのような類のものを言っているようです。

このうちの「第一 内部空虚ニシテ表面ノ装飾密ニ画カレ全形大ナル土偶」については、覆面をしている土偶だと、しかも東北地方に多いことから、「此覆面ハ當時寒威ノ襲来ヲ防グ爲メ使用セラレシモノタルヲ証スルニカアリト云フベシ」と縄文時代の人達は防寒具を使っていたという解釈を唱えました。

その土偶に見られる顔の被り物について、若林勝邦が防寒具だと唱えたとはしましたが、そのことを最初に唱えたのは、どうやら坪井正五郎のようです。

坪井正五郎は、「瓶ヶ岡土偶の面貌」という中で、土偶の顔を覆う防寒具があったのだらうと言いました。ところが、坪井正五郎は、防寒具ではなくて、遮光器だと考えを変えます。明治 23 年、24 年の頃、坪井正五郎はヨーロッパに留学し、ロンドンやパリにいました。あちらから、東京人類学会雑誌などに

頻繁に原稿を送っています。それらがロンドン通信やパリ通信として載っています。その中で、防寒具だとか遮光器だとかという説を唱えます。「雪中遮光器」という論文の中で、探検家のナンセンのグリーンランド探検旅行記の中に雪中遮光器の図が載っていて、それが亀ヶ岡の土偶の…先程の若林勝邦の一番目に挙げたものの土偶の目の部分に似ているというので、防寒具ではなくて、遮光器だと唱えました。

寒さを防ぐためのみに用いるように書いていましたが、「今思へば主たる用は雪から反射する光を遮って眼を保護するに在るのでござりませう、然れば土偶の面部に在る物は防寒器とみるよりは遮光器と見るが適當でござりませう」と言って、このような図を添えていました。これは、スリットが入っていて、目の前の光がわずかに入っているようになっています。これを遮光器と呼ぶのだそうです。これが亀ヶ岡の土偶の顔を示すものであるとしたわけです。

さらに、次の論文では、貝塚土偶に男女の別があることを示しています。東洋学芸雑誌に載せた「貝塚土偶の男女」（明治 31 年）では、土偶の各パーツ、面部・胸部・腹部・衣服・裸體・筒袖・股引について分類しています。それを踏まえて、二つの種類に分けています。「第一類 腹部が膨れて居て乳房部が通例著しく突出して居るもの。裸體の時には通例胸から腹に掛けて継線が付けて有って、間々半股引を穿いて居る。裸體の時は素面、着服の時は頭巾を被ぶって居る。着物は洋服形の筒袖、股引は細い。此類には遮光器を被ぶったり、シャツ形の筒袖を着たり、太い股引きを穿いたりした者は無い」これは坪井が示した図で、今の説明に従って、第 1 類と第 2 類に分けてみると、これは第 1 類だと分かります。これもそうですね。平たい。これもそうです。これも。

それから、第二類は「腹部が平らで乳房部が通例小さいもの。裸體の時は素面、着服の時は素面の事も有るが、通例頭巾を被ぶったり、遮光器を懸けたりして居る。着物はシャツ形の筒袖、股引は太い。此類には洋服形の筒袖を着たり、細い股引を穿いたりした者は無い」ということで、これなどは典型です。後で出て来る遮光器土偶の類のものを示しました。これもそうです。

このように分類した上で、第一類としたものは女性で、第二類は男性を意味すると考えているということです。敢えて、これを男だとするには無理があるのではないかと思います。男女の別があるということで、その具体的な姿を示したということです。

「土偶は、本当に男なのか女なのか」ということですが…現在では縄紋時代の土偶はほとんどが女性像だと考えられています。ただ男性土偶だとされたものも、いくつかあります。男性土偶だと見なされるものが出土すると、新聞のネタになるくらい珍しいことです。これは、山梨県の釈迦堂遺跡から出土した土偶で、ご覧の通り股間に突出した部分があります。これが出土した時には、男性土偶が出土した、というので大分話題になりました。しかし、これは男性のシンボルではなくて、出産の場面だろうと、縄紋時代の人の出産の姿を示したものだだろうというのが現在の解釈となっています。しゃがんで出産したのだということです。江戸時代でも、しゃがんで、上から吊るしてあるロープを掴んで、頑張って、子どもを産むというシーンなどがよくありますが、そういう様子に近いことであつたのかもしれない。

それから、真ん中のウサクマイ遺跡のものは、これも股間に突出物があり、これは多分男性なのだろうと思われまふ。乳房の表現がありませんから。また、今年の「発掘された日本列島展」の中で、最近出土した遺物として紹介された福島県高橋遺跡出土のものは、これも股間に突出物があります。男性土

偶だと言われています。確かに引っ張っていて、露骨な話をしますが…タマも付いているようだ…先も孔が空いていて男性の性器の表現のものかと思えるものです。しかし、ここは乳房の表現にも見えます。ですから、どうなのかと思えます。もしこれが乳房だとすると、これも出産の姿なのかなと密かに思っているのですが。一般的には、これは男性土偶とされます。

そして、この岩手県の盛岡市の川目A遺跡のものも男性土偶とされますが、ちょっとお腹の引っ張りが気になります。お腹の引っ張りというのは、お腹に子どもがいることを示したような表現ですので、どうなのでしょう。

この男性土偶と言われるものを代表として、私は「？」という気持ちを持ちますが、股間に突出物があるからと言って「男性だ」と決めるわけにはいかないのではないかと思います。勝手に、私が認定する限り（笑）、これは男性ですが、他に男性土偶だと言われているものは、果たして、そうなのだろうかという疑問を持っています。ただ、ほとんどは女性像だということです。

これまで、坪井正五郎の論をいくつか紹介してきましたが、坪井正五郎が土偶をとり上げてきたのは、以前にもお話ししました日本列島の先住民論争の中で、先住民の風俗を語る中で引用されることが目的だったのです。従って土偶本来の意味については、坪井とのやりとりの中では、ほとんどされることがなかったと言えます。しかし、一般の関心はかなり惹かれていた先住民論争の中でしばしば使われるということもあり、土偶そのものに対する詳細な観察が行われたのは間違いありません。特異な形態、紋様、風貌、顔つきなどの特徴を捉えて色々な呼び方がされます。先程紹介しました貝塚から出土することが多いということで「貝塚土偶」と呼ばれるもの、坪井正五郎がいう遮光器を付けたような顔だということで「遮光器土偶、髯が生えている様子があるので「有髯土偶」、それから「木菟（ミミズク）土偶」、**「黥面土偶」**、黥面というのは入れ墨という意味です。顔に入れ墨をしているような土偶です。それから先程も出てきました**「覆面土偶」**…このように色々な名称が与えられていきました。

坪井と並んで土偶について多くの論文を発表した人に、大野延太郎がいます。大野雲外ともいいます。大野雲外の「土版ト土偶ノ関係」という論文（明治30年 東京人類学会雑誌 12-131）の中で、「土版の紋様と土偶の紋様とは同形式にして土版は土偶の變化であろうと考えられる。また使用法のごときも同様のものならむ」ということで、大野延太郎は、土偶の用途について、意味について、土版と同じだといっています。土版は、護符、お守りだということで、土偶も土版もお守りだろうという考えを示しました。また、明治34年の「石器時代土偶系統品と紋様の變化に就て」明治34年 東京人類学会雑誌 16-184)では、土偶と土版・岩版の関係について「土版と岩版とは同形態にして全く土偶の退化したものに外ならず、故に土版・岩版が進化して土偶となりしものでなきことは事実であろうと信じておる」と言いました。

また、大野延太郎も土偶の型式分類を試みています。この大野の分類の中では、15例の土偶の図を載せています。この時点で分かっている287点という多数の土偶を15種類に分けて説明しました。その内訳の中で、47点が男性像で、男女不明が27点、213点が女性像であると認定しました。女性と思われる土偶が非常に多いということから、「女神即妊婦の崇拜する、安産の守神とでも云ふやうな譯であろう」と推察したということです。土偶は、女神像であるという説を唱えます。

坪井正五郎の主張していた石器時代の住民論争の中でのコロボックル説というのは、坪井正五郎がロ

シアのサンクトペテルブルグで客死することによって幕を閉じ、人種論争そのものが終焉を迎えます。土偶研究も人種論の材料としてではなく新たな段階に進むことになり、宗教上の遺物として把握されるようになっていきます。

高橋健自は『考古学』（大正2年）という本を出し、その中で「想ふに宗教的信念から一種の対象として態と不可思議なる状を表したのかも知れない」とした上で、首部、頭の形状から4種類に分類しています。頭の形が、尋常の物・山形のもの・木菟に似たるもの・眼鏡をかけたものという分類をしました。この分類の仕方は、今日でも同じような見方がされます。

そして、大正11年に鳥居龍蔵が「日本石器時代民衆の女神信仰」（人類学雑誌37-11）と題する論考を発表しています。この中で、「日本の石器時代（アイヌ族）民衆の信仰して居った宗教は抑もどんな種類のものではあつたらう？」ということで論を始めます。鳥居龍蔵ですから、日本の石器時代の住民というのはアイヌ民族だったという考え方です。つまり、石器時代に住んでいたアイヌ民族の宗教というのは、どのようなものだったのだろうかという土偶を通じて考えるわけです。そして、日本の石器時代の女神信仰について様々に論じます。

土偶について、これは「男性よりも女性のほうが比較的多い。否、ほとんど女性ばかりのところもあります。私はこれらの事実から彼らの土偶は男性よりもむしろ女性の方を多く作った事が推知されます」廻りくどいですが、女性像の方を、たくさん作っているということです。「彼らがかくのごとく男性の形よりもむしろ女性の形を作ったことは、そもそもどんな理由によってでありましょう。私は一般未開人やその他の例から推しまして、これは当時、彼らの間に盛んに女神信仰の行われた結果、ようやく多数なる女像が土偶やその他のものにも表現されるに至ったと思われまゝ。」としています。実例を挙げて、土偶の他に土版や顔面把手（土器の口縁部の所に人面の付いたもの）までも女神として考えて説明をしていきます。

また、土偶には玩具もあるというのも、多くは宗教上のものであって信仰上の神像だとしました。さらにその胸の部分、「乳房を甚だしく突起させ腹部をすこぶる肥満せしめ、またあるものには陰部さえも現れておるので、何者かのシンボルである事が知れます」としました。

ヨーロッパの女神像の例を紹介して、女神信仰が起こるのは地母、母なる大地・物を生産する大地に関係を持つものだという事で、日本の石器時代の民衆には地母神信仰というのがあつたのだろうと考えました。それで、土器作りや土偶、土版などの多くの製品の作り手の多くは女子で、シャーマン、巫女として従事した女性たちがいたということを論じました。この鳥居の説は後に批判されることになります。

谷川磐雄、後の大場磐雄が「土偶に関する二三の考察」（大正15年 國學院雑誌32-5）という論考を出しています。ここでは土偶を3つに分類しています。

用途については「石器時代民衆の呪物として使用されたもの」としています。また、ほとんどの土偶が破損した状態で発見されることについて、アイヌの埋葬例だとか、タヒチ島やトンガ島の例を紹介した後に「石器時代民衆の靈魂観は万物に靈を認むる所謂 Animism（アニミズム）の時代であつて、土偶も完全なものはよく靈力を憑らしめて magic として役立つのであるが、一旦破棄すればその能力を消失して、土器の破片と同一視せられ、貝塚に放棄されるに至つたものであろう」と述べています。

全てのものに魂、霊がある Animism 信仰という時代で、その依代のようなものが土偶であるということです。それで、壊れてしまうと、その霊力を失ってしまうから、変な言い方ですが、ポイと捨てられるというような解釈をしたわけです。

遺物そのものに従って考えていこうという風潮は、土器の研究者でもあった甲野勇によって受け継がれています。甲野勇は「日本石器時代土偶概説」(『日本原始工芸概説』昭和3年 所収)という論文を書いています。その中で、現在の土偶分類の礎になる分類として分布、形態などからA～E類の5型式に分けました。

A類—所謂ミミズク土偶

B類—所謂山形土偶

C類—陸奥式土偶中の一類 (所謂遮光器土偶)

D類—写実的な体軀をしたもの

E類—陸奥式土偶中の一類、目の表現の尋常のもの

実物で見ますと、これがA類—所謂ミミズク土偶です。顔がミミズクの形に似ているという所からミミズク土偶と言います。ミミズク土偶と言う名前では私は勉強してきましたから「ミミズク土偶だな」と思いますが、ミミズクに見えますか?…ちょっと見え方が明治時代の人と違うのかなと思いましたが。特徴は顔の輪郭がハート型みたいになっていて、ハートではないものもありますが、非常に大きな目と口が粘土の平たい丸い板を貼りつけたようなものです。それから、耳の所に耳飾りがあります。胴部の特徴は、小さい手がちょこちょこ付いて、ここの所にはちゃんと乳房があります。そして腰が張っているものです。

これがB類の土偶です。所謂山形土偶です。山形土偶の云われは頭の形です。頭の形が山の形をしているからですが、ミミズク土偶の命名の仕方からすると何とも直接的な命名です。この山形土偶はかなり写実的な表現のものがあります。お腹が出っ張っていて、まさに妊娠している女性のお腹を想定させるような非常に写実的なものです。

それから、C類はいわゆる遮光器土偶です。これが遮光器土偶です。坪井正五郎はこれが男性像だと言いましたが、甲野勇はこの胸の表現やお腹が膨れていることから女性像で間違いないと考えました。

D類は、写実的な体軀をしたもの…こちらの方が写実的といえるような気がします…これは顔がハート型でハート型土偶と分類されることもあります。

E類は、陸奥式土偶の中の一類で、これとこれは東北地方に多く出土する形です。この仲間は関東にも出てきます。これは大きく足を踏ん張っていて、特徴は頭の表現です。それから、目の表現はこれと似ています。粘土を貼り付けたような形です。

また甲野勇は「容器的特徴を有する特殊土偶」(昭和14年 人類学雑誌 54 - 12)で容器型土偶について書いています。この特徴を「何れも其の外観は極めて大形で、體の内部は空洞徳利状を為し、薄手に製作され、頭頂或ひは底部に必ず比較的大形の口孔が開かれて居る等、普通土偶と異り甚だ容器的特徴」を示すものとししました。それまで発見されている土偶を6例紹介しています。これは、そのうちの非常に著名な2つです。

これらの用途が「幼くして死せる者の骨を入れる為に、母性的性質を有する土偶型容器を製作使用したと云ふ推定も認容出来やう」とまとめています。躰が中空で、子どもの骨などが納められるということで改葬した骨を納める蔵骨器としての意味合いがあり、母親の胎内に戻すという意味を持った土偶だろうとしています。つまり、この土偶は、母です。このように容器的特徴を示すものがあるということです。大体晩期の終末、つまり縄紋時代の最後の頃から弥生時代にかけて、関東地方西部から中部地方にかけて限られた地域ですが分布しています。実際に新生児の骨や歯が納められていたものがあつたということです。土偶の意味の一つを暗示するものなのかなと思います。

八幡一郎は「日本先史人の信仰の問題」(昭和14年「人類学・先史学講座」)と題する論文を著しています。この論文は、7項目にわたって信仰に関する例を挙げています。中でも、土偶の特殊な埋没状態、発見状況に着目し、遺物の出土状態から、その遺物の性格を考えています。これは考古学の研究手法としては非常にオーソドックスなものです。遺跡を発掘して、その遺物がどのような状況で出て来たのか、どのような遺構に伴って出て来たのかというようなことから考えてみることをしました。

長野県の廣見遺跡など、土壙の中から出て来た遺跡などの例を挙げて「今後は先づ土偶の型式を調査し、型式の歴史的序列と地理的分布を吟味することにより、土偶の變遷並びに文化圏との関係を究める必要がある。さすれば土偶本来の姿を求めることが出来、それによって眞の意義の把握が可能となろう。或型式が或文化圏に存すると云ふことが確かめられれば、他の文化要件との關聯によって、該型土偶を生んだ社会的背景を知ることが出来、従つてその意義を追求する便宜が得られる。」という発言をしています。

これは、土器の研究と同じです。土器を紋様や出土状況・層位的な状況などから型式学的に分類していつて、分類した結果で土器の変遷を考えるのと全く同じです。甲野勇にしても、八幡一郎にしても、そういった方法で縄紋土器の研究を進めてきた人達だということで間違いないわけです。

また、鳥居龍蔵が述べた「土偶が地母神信仰の女神像である」ということを痛烈に批判しています。というのは、地母神というのはヨーロッパの新石器時代の土偶の解釈だからです。ヨーロッパの新石器時代というのは農耕社会です。農業をしている社会のなかでの地母神信仰なのです。ヨーロッパの新石器時代の土偶の解釈というのを日本列島にポンッと持ってきて、それは違うだろうというわけです。農耕社会を背景として作られたヨーロッパの新石器時代の土偶の解釈を、まだ農耕が行われていない縄紋文化に適応させるのは違うということを指摘しました。

そして、八幡一郎は戦後、「日本の先史土偶」(昭和34年 MUSEUM 109)という論文を出しました。これは土偶を勉強する時には、必ず見なくてはいけない論文の1つです。それまでの土偶研究についてのまとめをしました。「土偶の総合的研究は幾度か試みられたが、まだ完璧とは言われぬ。このような土偶の時代様式、地方様式が追究されて、ゆるぎない体系ができるまでは色々な基本的問題に深く立ち入ることは難しいのである。」ということで、土偶の出土状況や紋様による型式分類などを踏まえて、土偶の、土器でいう編年表のようなものを作っていき、その上で研究は進められるのだという前提に立ちます。

そして、土偶の製作目的については、護符であろうといっています。どのような根拠かは分かりませんが、護符・お守りだろうとしています。

また「土偶には五体揃って完全な姿で残るものが至って少ない。」「土偶は呪物として人間の疫病、傷害、その他一切の災害の身代わりになる。」としています。例として、「足を折ったとき、土偶の足を折れば、癒りが早い。頭痛がひどいとき首をもげば、直ぐに治るといった役割をもつものだ、というのが、呪物説の根拠である」とします。しかし、これは五十歩百歩で、なかなか万人を納得させるものではなく、土偶そのものの形の上から判断することは、前に述べたように、体系が出来上がらない以上ほとんどその限界に達している状況であるとしています。

改めて、遺跡内における土偶の在り方から、土偶のもつ意義を明らかにしようという態度が、考古学としての本筋で、当時の生活設計の中で土偶の占める位置を見出すことが、土偶そのものの役割を知る重要な契機であるとしています。縄紋時代の生活の中で土偶の占める位置を見るということは、土偶が遺跡の中でどういう状況で出ているのかということを確認することによって、得られるわけです。

また、土偶の意義を明らかにする間接的な手段の一つとして、日本以外の各地域の土偶の在り方というのを概観しようとしています。日本以外のところでは、女性土偶というのは、大抵農業と結びついている印象を受けることが多いのです。しかし、東アジアでは必ずしも女性土偶と農業とが結びつかないのです。「農業のあるなしを問わず我が縄紋式文化に女性土偶があるということは、いささか奇異の感を抱かせる。なぜであろうか。縄紋式文化に大陸や南方とは違う農業があったのであろうか」と言っています。地母神的なものという考えがどこかに、まだあるのかなという感じはします。しかし、女性土偶が実際に農業と結びつかない例というのが、冒頭でも示したようなヨーロッパやシベリアの旧石器文化、後期旧石器時代の女性像というものであります。農業と結びつかない女性像ということも改めて指摘します。北方ユーラシアの新石器文化は、狩りと漁で生活した人々の間で形成された文化で、その文化の一要素に粘土・骨角器・マンモスの牙で作った偶人、人形が、稀に男性もあるが、多くは女性を象っています。そういったものの中には、縄紋時代の土偶とよく似たものがあります。狩りと漁を主な生業としたものであろう縄紋式文化人が女性土偶を作ったとしても、ヨーロッパやシベリアなどの例を見れば不思議ではないだろう、そして、農耕社会における女性土偶の役割、狩猟・採集社会における女性土偶の役割が、同じなのか、違うのかということも、もう一度よく検討しなければいけないということで、しめくくっています。

昭和 35 年に『土偶』（校倉書房）という単行本が出されます。慶応大学におられました江坂輝彌さんが書かれたものです。先程お話した愛媛県の上黒岩遺跡の線刻礫を発見した方です。これは江坂先生のご自慢で、しょっちゅう持ち歩いておられたそうです。「こんなものがあるよ。」と見せてもらったことがあります。

その江坂先生が『土偶』という本を出しまして、これは縄紋時代土偶研究の集大成といえるものです。全国の土偶について、総括し、土器型式との編年的対比により、分布、地域ごとの分類を試みました。ここでは、その本の目次だけ紹介していきます。

プロローグとエピローグがはじめと終わりにあります。その間、第 1 章から第 18 章まであります。第 1 章から第 5 章までは、縄紋時代早期の土偶・前期の土偶・中期の土偶・後期の土偶・晩期の土偶として時期ごとに土偶を示しました。この頃、草創期という区分はあまり一般化していませんでしたので、一番早い時期は早期という表現しています。

第 6 章は、晩期以降の土偶についてです。これは弥生時代と簡単に言わず、北海道には弥生時代がな

いので、晩期以降、縄紋時代以降の土偶ということです。

次に、土偶の仲間と考えられるものについて、以下で見ていくわけです。第7章では、三角石器と三角形土製品について、今日の冒頭で三角形土製品を示しましたが、あのように土偶の簡略化された物についてということだと思います。第8章では土版について、材質の違いということで、第9章では岩偶、石で作られた人形と、岩版、石で作られたタブレットについてです。第10章は土製仮面です。先程例で示したのは小さな仮面でしたが、実際に人の顔を覆うような仮面というものもあります。岩手県の北上の遺跡では、仮面とする板に取り付けたのではないかと考えられる顔のパーツ、鼻や耳や口を土で作ったものが出土しています。ですから、お面を被って何かしたのは明らかどころです。

次に第11章では角偶、シカの角を使った人形について。第12章では動物形土製品…これは次回触れるかも知れませんが、動物の形を焼き物にしていますが、圧倒的に多いのがイノシシです。イヌが少しあって、サルも一匹います。不思議なのは、イノシシが縄紋時代の人にとって身近な存在だったということは、狩猟の対象だったので分かるのですが、もう一つ主要な狩猟対象だったシカについては作られていないのです。一体なぜなのでしょう…ちょっと不思議なところですね。最近イヌも出てきました。あと、得体のしれないカメみたいなものや動物をデフォルメしたような土製品もあります。

それから、第13章では動物形石製品と骨製品、第14章では顔面付土器・獣面把手・顔面把手、これは土器の口縁部に人面のようなものが付いているものです。縄紋中期の顔面把手というのは、確かに目があり、口や鼻があり顔でしょうけれども、しかし、普通の顔には見えないような、目を吊り上げたような風貌のものがあります。これは、本当に人なのかしら？もしかしたら、リスのようなものを模したのではないかと思いましたが、実際にそのような顔をした土偶が中期に出てくるので、人面の表現だと分かるわけです。獣面把手は、獣の顔です。ムササビなどがあります。それから、第15章は特殊な遺構内から発見された土偶ということで、先程お話した八幡先生が見てきたような「遺跡の中における出土状況を考える」という中で取り上げられるような材料です。これは、次回もっと詳しくお話します。第16章では土偶はすべて女性か、第17章は土偶各部の文様から見た縄紋時代の服装とあります。これも、次回また触れますが、土偶の胴体に付けられた模様というのは、実は土器に付けられた模様と同じなのです。また、土偶の体の模様というのが衣服だとすると、先程の「物形土製品のイノシシに付いている模様はどうかのだろうか、と比較して考えなければならないところが出てきます。最近、縄紋時代の衣服を復元することがよくされていて、この博物館にある女性像も衣服を着ています。おそらくモデルは土偶だろうと思います。もう少し考えなければいけないところがあるわけです。そして、第18章は、土偶・岩偶偽物考です。このように土偶と土偶に関連する物について集大成しました。

そして、土偶の解釈として、一世を風靡したとまではいかないまでも、非常に著名になったのは、水野正好さんの「土偶祭式の復元」(昭和49年 信濃26-4)という論文です。これは、土偶を巡る祭式があった、と土偶の祭式の存在を前提として研究した論文です。従来行われてきた土偶に対する見解の立場には、見た目からする直感とか、国の内外の宗教学や民俗学からの帰結を引用した把握をされています。土偶それ自身から、その出土状況を凝視しようというのが乏しかったので、他の学問の成果、或いは、他の学問の視野に立った分析や解釈の傾向が強かったので、この際、考古学以外の他の分野を顧みないで「土偶自体を凝視し、その出土状況を組み成して祭式の実際を具体的に復元」しようということで研究したものです。ですから、仮説の積み重ねですが、一つの解釈ではあります。

土偶を巡る一つのシステムとして祭式があったということが前提となって論を進めていきます。水野正好さんは、土偶は全て女性で成年女性を表現したものとし、土偶そのものの姿から、第一相から第三相に分けました。

第一相 母となるべき女

第二相 子供をやどす女

第三相 子供を育てる女

という三つの要素に分けます。女性の特質である妊娠と出産と育児を示すことによって、成人女性の手により、土偶が制作された可能性を強調していきます。「母となるべき女性が子供をやどし、やがては誕生、養育する一つの流れをもった過程を示すもの」で、土偶が壊れて見つかるということについては、土偶を破壊するという前提で、「死の表現の一つのあり方」だとしています。そのような解釈をしています。

繰り返しになるかもしれませんが、土偶自体のあり方から考えられた結果というのを見ます。

- 一. 土偶は、母となるべき女性を完全な形で表現するものとして誕生した。
- 二. この土偶は、身籠り、出生への流れをもつ。
- 三. 土偶はやがて母となるべき日を迎え、その胎児の出生にあたり、人の手で損壊=死=殺害される。
- 四. 死してのち、その土偶は身体の各片が各地にばらまかれ、村のすべての新生に力を与える。また、時には墳墓が設けられ、土偶はそこに葬られる。
- 五. 葬られた土偶は、その墳墓の中、死の状況の中で子供を出生させ、村の新生に力を与える。

このような過程をたどるものだと解釈をします。つまり、土偶祭式は、受胎・死・再生といった輪廻をもつものだという解釈です。これが縄紋時代の時代を示す思惑であって、その展開の過程というのは、縄紋時代の人々の思いのモチーフを示すものであるというふうに解釈しています。具体的な事象として、我々が見ることができるのは、土偶が壊されて出土する、完全な形では出土せず、時には手だけ、或いは頭だけという形で出土するということです。しかも、一箇所にまとまって出るわけではなくて、一つの遺跡の中で、かなりばらばらに見つかることがあります。実際に遺跡の中で見られる状況を、このような輪廻の中に組み入れて考えたわけです。これは仮説ですが、ここまで踏み込んで物をいう人は今までいなかったのだから、先程も言いましたが、一世を風靡したとまでは言えませんが、かなりの影響力を持って取り扱われていました。

そうは言っても、批判する人もいまして、小野美代子さんが「水野氏の見解は、すこぶる本末転倒している感があり、批判されなければならない見解であると思われる。」「ある種の観念が先に存在していて、それを裏づけるべく、用途の定まらない遺物を利用したならば、百人百様の見解ができあがるのではないだろうか。」（「土偶研究の現状と今後の課題」昭和 49 年 遮光器 8 号）と批判しています。確かに、そのような批判はできると思いますが、大袈裟にいうと、学問とはそのようなものだと私は思います。何か事象があり、そのことを説明するのに、どのように解釈したら、一番合理的か、納得いくかという仮説を積み重ねていって、解釈をするというのが一つの学問のやり方でもあるのではないかと思います。「百人百様」の見解ができあがったというのは、それはそれで良く、正しいか、正しくないかということと、話は別なのだと思います。批判は、批判として、受け止めて良いと思います。

それで、水野説では先程も言いましたが、土偶が壊されて、村、遺跡のあちこちに、ばらまかれることによって役割を終えるのだというのが、重要な点です。

土偶は、壊されるのか、壊れるのかという点ですが、壊されるために作られるという見方は、坪井正五郎以来よく唱えられてきたものです。これは、完全な形で出土することがほとんどないということから言えるのです。完形に近いものであっても、どこか軀の一部が欠けているのが普通です。非常に有名な亀ヶ岡の遮光器土偶で、大きなものが、東京国立博物館にあります、「ほとんど（軀のパーツは）全部揃っているが、脚が片方だけない。他は全部ある」というように一箇所欠けています。どこか欠けているのが普通です。

ただ、壊されたものかどうかということについては、それも仮説としてそのようなことを唱えるのは良いと思うのですが、このような例があるのです。これは、富山県の長山遺跡の土偶ですが、粘土でパーツを作り、それをくっ付けて土偶の全体の形をとっています。レントゲン写真を撮ると、よく分かります。その結果、壊れている状況を見ると、パーツをくっ付けた所から壊れているわけです。壊す前に壊れるのではないかと…「壊す」というのも1つの解釈ですが、「壊れる」というのも間違いではないと思います。土偶をわざわざ壊すものだとするならば、完全な形のものはどうなのであろうということも考えなくてははいけません。

これは、青森県の風張遺跡の国宝の合掌土偶です。これは全く完全な形をしています。これが出土した状況は脚が欠けていました。一軒の家の中の別の場所に置かれていました。これは壊れたか、壊したのか、解釈が成り立つのかもしれませんが、復元すると、このようになります。これも初期の土偶で、首が割れていますが完全に近いものです。これは、これで、完形、一個の土偶ですが、ここに穴が開いているので、もしかしたら、首にあたるようなものを差し込むということをしたのかもしれませんが、これは、上半身だけの土偶で、千葉県の本の根遺跡というところで出土した例です。特に初期、草期・草創期の土偶には、小さいからかもしれないが、このように完形の土偶というのがいくつも存在します。壊されていない土偶というものもあるということです。

「壊した」という積極的な解釈をとるよりも、ひょっとしたら「壊れた」という解釈の方が、多くのものには妥当ではないかと思っています。これも、出土状況を見る中で、そのようなことが言えると思います。国宝の土偶というのは、現在5体あります。その5体のうちの3体が、私の承知している限り、ほとんど完全に近い形をしています。

第一の土偶は、縄紋のヴィーナスといわれる土偶がありますが、これは脚が欠けていて、ちょっと離れた所から出土して、くっ付けたことで、完全な形となったものです。先程も言いましたが、私は「壊す」よりも「壊れる」じゃないかなと思っています。あまり根拠はないのですが…（笑）

今日はこのくらいです。土偶の話を始めると、きりがいい感じがします。もう一度、次回、この土偶の出土状況や時期ごとの変遷などについてお話をさせて頂こうと思っています。

司会：時間となりましたので、本日の館長講座を終えたいと思います。最後まで、ご清聴ありがとうございました。次回は、12月24日。二週間後になります。本年度最後の館長講座、第15回館長講座『第2の道具(2)』と題しまして、同じくここで行いたいと思います。12月24日もぜひお越し下さい。今日

は最後までありがとうございました。